

## 連載

## 適応行動としてのソーシャルスキル Part 2

萩原 拓

北海道教育大学旭川校

Vineland-II適応行動尺度がようやく発行となりました。おそらくこの号でも何人かの先生はそのことについて触れていると思います。この尺度の開発に携わった者として、僕にとっても感慨深いものがあります。Vineland-IIはすでに多くの人が利用を始めており、適応行動のアセスメントの重要性がさらに高まっていくと思います。

さて、前回からソーシャルスキル支援を適応行動の枠組みで捉えてきました。今回は、ソーシャルスキル支援の基盤といいますか、支援手段に共通するものを挙げていきたいと思います。本屋さんに行きますと、ソーシャルスキル支援に関わる本の多さに驚きます。発達障害関連のコーナーがあるのはごく当たり前になってきていますが、その中でもソーシャルスキルや問題行動などに触れている本の多さはやはり目立ちます。ソーシャルスキル・トレーニング（SST）という言葉も、教育・福祉の現場でよく使われるようになってきました。正確な数は把握しきれませんが、ソーシャルスキル支援の方法はたくさん開発され、研修会や書籍などで発表され、支援で実践されているのだろうと思います。アメリカなど英語圏では、実際に様々なソーシャルスキル支援手段や絵本、ゲームなどが紹介され続けています。その多くは残念ながら日本で翻訳されていませんが、もしご興味がおありなら、アメリカのAmazon（[www.amazon.com](http://www.amazon.com)）にアクセスして、Searchという検索欄に「autism」「social」の2語をタイプして「Go」ボタンをクリックしてみてください。バラエティーに富んだ本が出版されていることに驚かれると思います。日本でさえ、決して少なくない量のソーシャルスキル支援の情報が存在するのに、それをはるかに

上回る英語圏では一体どのように支援を選択し、実践しているのでしょうか。

応用行動分析（ABA）が一つの手段ではなく、そこにさまざまなアプローチが存在しているように、ソーシャルスキル支援にも開発者独自の解釈や実践手段があって、それらを象徴するネーミングが与えられているのだと思うのです。しかし、そのような支援手段を利用するユーザー（消費者とも言えるでしょう）にとっては、たくさんの方法が提示されてもどれを選択して良いのかなかなか分かりづらいことも少なくないのではないでしょうか。やはり、支援者にある程度の基礎知識があるか、または信用できる専門家のサポートがあるかなどの下準備は必要なのではないかと思うのです。それでも、教育・福祉現場においてそのような条件が揃っていないことが多いと思います。そこで本稿では、ソーシャルスキル支援の基本的意図と、その実践で「これだけは押さえておこう」ということについて述べていきたいと思います。これらはあくまでも僕自身の考えですので、絶対的なものではありません。また、専門家や支援者によっては僕の考え方を違う方も当然おられるわけなので、その点にも留意いただければと思います。

## 暗黙のルールは見える形に

前回、暗黙のルール（マイルズら、2010）について触れました。ソーシャルスキル支援には、暗黙のルールをターゲットにしたものが多くあります。定型発達の世界では常識でも、それがASD当事者にはそうだと学習されない、周りがそのように振舞っているから自分もそうしようという気持ちにならな

い、また、ある「魔法の言葉」を知らなかつたためにその場における自分の立場が危うくなる（例えば、怪我をした友達に「大丈夫？」と適切なイントネーションと表情で声かけする）など、実に様々な理由によって、暗黙のルールはASD当事者にとって分かりにくく、見逃してしまいがちなものです。ですから、ソーシャルスキル支援対象を考える上で暗黙のルールは是非とも候補に加えるべきものであり、暗黙のルールがわかつただけで過ごしやすくなる環境が増えていくこともあります。

ソーシャルスキル支援で暗黙のルールをターゲットとするときに守るべきことは、「本人に見える形にする」ことです。これらのルールはたいてい文章化されておらず、さらに言えば、当たり前すぎて口言葉で発することも通常はないといったこともあります。支援対象者が分かっていないルールを見るようにするプロセスは、どのソーシャルスキル支援でも行われていることです。世界中で使われているソーシャルストーリーズ（グレイ, 2010）でも、暗黙のルールは常識を確認するなどの文章で明確化されています。また、対象者がそのまま発言できるように、状況に適したセリフなどが明確に書かれたスクリプトなどが準備されている方法もありますし（マカフィー, 2012）、パワーカード（ギャニオン, 2011）には子どもは自分が憧れるヒーローが行う振る舞いやセリフ（もちろん、フィクションですが）が書いてあり、カードは暗黙のルール行使するときの具体的リマインダーとなります。

暗黙のルールを見る形にするには、様々な方法があります。その多くはいわゆる「視覚化」でしょう。ASD当事者は視覚優位、つまり、目に見えるものの方がより情報を取り入れ理解することができると言われています。しかし、すべてのASD当事者が視覚優位というわけではありません。また、ある支援手段が用いている視覚化がすべてのASD当事者にとって分かりやすいというわけでもないのです。視覚化には、写真・動画といったより具体的なものから、マンガなどの描画、さらには文章化までいろいろな手段が考えられます。コミック会話（グレイ, 2005）などの方法ではマンガを使用していますが、それが使用者本人にとってわかりやすい情報形態であるかは、やはり使ってみなければわからない場合もあります。つまり、



ソーシャルスキル支援手段を考えるとき、または選択するときは、その支援手段が用いている情報提示の仕方を考慮する必要があるのです。もし、ある支援手段の情報提示の仕方が支援対象者に合わない場合は、それを支援者側が対象者に合うよう作り変えるというアレンジも必要でしょうし、無理な場合には他の支援手段を選択する必要も出てくると思います。

### 自分が納得したソーシャルスキル

いくら暗黙のルールを見る形にしたところで、そのルールを利用する本人がルールの利用価値に気づいていなければ元も子もありません。ソーシャルスキル支援で重要なところは、その本人が暗黙のルールやその他のソーシャルスキルを理解して、それを利用すると自分にとって良いことになるというメカニズムを本人なりに分かっていることなのです。ですから、支援者側が当事者をアセスメントし、その結果に基づいて当事者の社会適応に必要になるであろう暗黙のルールを明文化して提供しても、使う本人がその気にならなければ支援効果は当然見られません。

本人が理解し、納得するためにはどのような方法がよいのでしょうか。定型発達の場合、日々の少しづつの試行錯誤や他者の真似などで経験を積み、それが自分のソーシャルスキルとなっていくこともあるでしょう。多くの場合、そのゆっくりとしたソーシャルスキル獲得のペースは、周りの多

くの子どもたちも同じような試行錯誤や真似をしているために、比較的大きな失敗や精神的負荷などがかかるのではないかと思います。しかし、ソーシャルスキル支援の対象となるASD当事者にとってソーシャルスキル獲得の必要性が明らかになったライフステージでは、周りの同年代はそのようなスキルをすでに獲得しており、当事者本人には何らかの社会的困難性が現れています。ここで、これまで通りの自分の振る舞いをすぐに変更するということはやはり難しいのではないかと思います。そのために、理解や納得のためのプロセスがソーシャルスキル支援には必要になるのです。

ストーリーやマンガ、動画などの媒体を使った支援手段でも、効果的な手段ではこのプロセスを大事にしています。多くの場合は、現状を客観的に支援対象者が把握できるように説明し、対象者が困っている、イライラする、うまくいかないといった感情はどうして生まれるのかがわかりやすくなっています。または、本人が自分の問題に全く気づいていない（例えば、他者に不快な思いをさせているなど）は、「実はこうだったんだ」と気づくことができるような構成になっています。この段階がクリアできれば、どのようなことをすれば問題がなくなるのかというシミュレーションを、お話やロールプレイなどで本人に紹介していくことができるのです。

## 自分のものであるという支援

ソーシャルスキルを獲得し使うということに、本人の理解や納得が重要なことと並行して、ソーシャルスキル支援に自ら加わっていくというプロセスも押さえておきたいポイントです。僕がアメリカでASDやその支援について学んでいたときに、「支援は、支援対象者のOwnershipを高めることが重要」と習いました。Ownershipとは所有権などと訳されますが、つまり支援対象者が「この方法はぼくのもの」と思えるような支援プロセスにしなければならないということです。僕自身の講義でも学生に強調しているのですが、支援をするときには、「できる限り本人と一緒に支援を作っていく」ことが重要だと思います。

昨年度、学生の卒論プロジェクトで幼稚園児の

ソーシャルスキル支援をしました。その園児がクラスの中でみんなと一緒に行動することを、「本人がすすんでやる」という視点で絵本を作り、それを支援者（学生）と一緒に毎日見るという構成にしました。その際、絵本の内容決めやデザインなどすべての過程をその園児と一緒にするように学生に指示しました。そうすると、園児は自分でその本を作り、自分でその本に書いてあるような行動をし、そして自分でその本の結末にあるような良いことをする（または楽しい思いをする）という結果となりました。このプロセスで、園児は自分に対して行われている支援ですが、自ら参加し支援の主導権をとること（もちろん、実は支援者がコントロールしているわけですが）で、支援のOwnershipを得ることになったわけです。

このように支援構築に本人が参加することにより、まず、本人がわかりやすい情報提示や支援形態がアセスメントできます。同時に、本人により合ったものに支援を微調整することもできるのです。この園児の場合、本人参加型支援の前にはソーシャルリマインダーとして適切な行動が必要なときにカードを渡し、行動がうまくできたときにはご褒美が得られるシステムを使っていましたが、作成を全て支援者側で行ったため、効果はごくわずかなものしかありませんでした。ストレスコントロールなどでもそうなのですが、本人と一緒に組み立てていく支援は、より維持が続くと思われますし、また、将来自ら使えるツールとして生き残っていく可能性も高いと思います。

## ソーシャルスキルの選択は本人のレベルと気持ちに合わせて調整を

ソーシャルスキルが必要となる場面では、多くの場合、一つのシチュエーションに一つのスキルだけが有効というわけではありません。その場面を構成している要素の変化に合わせた柔軟な対応が、年齢が上がるにつれて要求されています。以前、他者に対して名前を呼ぶときの「〇〇くん」や「〇〇さん」の使い分けについて、ASDのある成人の方に質問を受けました。彼は高校もかなり前に卒業していましたし、定型発達の見方をしたら、「そんな当たり前のこともできないの？」と思わ

れるかもしれません。しかし、もし彼が高校を卒業してから限られた人々との社会的やりとりしか経験されていなかつたら、またもし、彼の会話体験のほとんどが学齢期を含めて受容的なものだったとしたらどうでしょうか。彼がこのような質問をするのも、僕には理解できることでした。彼はこのような日常の疑問を長期間反芻して悩んでしまうことがあります、早めに彼がスッキリする解決策と一緒に考えていく必要でした。

僕はまず、「くん」と「さん」を自分の年と比較して言い分けることを彼が知っているか確認しました。学校では先輩後輩もはっきりしていますし、大抵このルールが一般的に使われると思ったからです。ちょっと自信がないようでしたが、このルールは学齢期の経験からわかっているようでした。しかし、このルールは学校のように学年から相手の年齢がわかっているときは利用可能ですが、成人の社会では相手の年齢をあらかじめ知っていることはそうありません。さらに、はじめは「〇〇さん」と言っていたのに、年齢が自分より年下とわかってからいきなり「〇〇くん」と変えるのもぶしつけだという印象を与えかねません。「さん」や「くん」のボーダーラインは、特定の他者と会ってからいろいろな会話をし、その中の様々な情報の断片を推測して「双方にとって自然なかたち」で越えていくものだと思います。このような社会的コミュニケーションは、質問をしてくれた彼には難しいだろうと僕は思いました。

このようなことについて、お互いがわかるような会話を続けていき、「さん」とか「くん」を使い分けることが彼にとってやりたいことなのか、それとも面倒なことなのかという点に話が移っていました。彼はできるならあまりこういったことに悩みたくないという意見でしたので、それならば、これからは「〇〇さん」で統一するのはどうかと提案してみました。「〇〇さん」は年下に使用してももちろん大丈夫ですし、また男女の区別も必要ありません。彼もその案に納得して、そのルールを何回も口で繰り返していました。残念ながら、彼がそのルールを生活に適用しているかその後確認が取れていませんが、少なくとも、このルールを決めることによって彼の悩みが一つ減ったことは確かだと思います。

ソーシャルスキルは適応行動に含まれるものですから、支援では当然年齢相応のスキルを獲得することが大前提だと思います。しかし、それが難しい場合も多々あると思うのです。ここで挙げた例のように、本来ならばさまざまな呼称の使い分けができるのが定型発達的にはゴールだと思いますが、そのスキルを使う当事者のレベルや生活環境、また何よりも本人が納得して楽に使えるスキルを選択する手伝いをするのが支援者の役目なのではないかと考えています。

## 実際場面で使えるスキルにする

本稿ではソーシャルスキル支援の根幹について述べているわけですが、この支援に共通する課題ももちろん存在します。その一つは、ASD当事者には獲得したスキルを異なるシチュエーション、つまり実生活で使っていく、いわゆる般化が難しい人がいます。SSTなどでは社会的場面を設定し、スクリプトになった社会的やり取りを分析し、支援対象者に具体的な提示をしていきます。たいてい、シミュレーションとしてロールプレイが含まれます。多くの当事者はここまで比較的楽にクリアできると思います。しかし、獲得した（と思われる）スキルを、使用すべき実際の場面で使うことがなかなか難しいことがあります。これは、彼らにとってスキル獲得時の状況と実際場面が違って認識されている場合、また彼らにとってあまりに多くの社会的情報が処理しきれない場合などが考えられます。

このような場合さまざまな対策が考えられます。ソーシャルスキル支援においてシミュレーションやロールプレイが終了した段階で、実際場面で支援者がプロンプト（声かけ）をすることも良いでしょう。このとき、他者にわからないようなサイン（肩をたたくなど）をお互いに決めてても良いと思います。また、支援で習得したスキルを使わざるを得ない状況を支援者が作ってしまう手もあります。例えば他者への要求や、逆に他者からの要求に対応するスキル支援の場合、シミュレーションのレベルがクリアされたのならば、グループの中で限られた道具を分け合い、また貸し借りをしなければならない課題を与えることが考えら

れます。本人はスキルを使わざるを得ない状況です、また教師からのプロンプトを加えてもいいでしょう。この課題が本人にとって達成感が得られる場合（そのグループで自分の考えが採用されたなど）、成功体験も得ることができます。このようなやり方は、機会利用型指導や偶発的学習といったスタンダードな支援手段を利用したものです。

さて、社会的状況の微妙な違いを曖昧に捉えて「同様なものだ」とするのが難しい場合に、別のアプローチを取ることも考えられます。それは、多くの状況で使えるソーシャルスキルを獲得することです。昨今、「ユニバーサル」という言葉が様々なところで使われています。公共の施設にはじまり、学校の授業に至るまで、ユニバーサルという考え方は実に合理的に思われるし、何よりも、時代の最先端のような印象を与えます。僕も特別支援教育に携わっているので、少なからずユニバーサルの考え方をしているのだと思いますが、現在いろいろなところで言われているユニバーサルについては、わからないことが多いです。このような時代に合わせるわけではありませんが、ソーシャルスキル支援にもユニバーサル的なものがあって良いのではないかと思っています。

実は、われわれは広範囲な状況で適当に対処できるユニバーサルな社会的対応を日々使っています。その最たるものは若者たちです。何を聞かれても「ビミョー」で答える術は、確かに相手に気持ちを伝えていませんし完全な意思疎通は図れていませんが、少なくとも若者たちの間ではその場は成り立ってしまうのです。僕は大学でASDの成人と学生ボランティアとの集いをプロデュースしているのですが、

あるとき、「ビミョー」を流行らせようと試みたことがあります。それは、集まりに来た参加者に「〇〇くん、職場は楽しいかい？」とか挨拶代わりで聞くと、自分の本当の気持ちを言わなければと一生懸命考えてしまうことが目立っていたからです。これはあくまでも挨拶代わりですから、それほど正確に自分が感じたことを述べなくてもいいわけですから、「ビミョー」もいいかもしれないと思ったのです。僕が教えている学生たちは、このようなときにはすべて「ビミョー」を多用していましたし。

結果は成功と言えました。一時的に、確かに、挨拶代わりのやりとりはスムーズになりましたし、彼らも「ビミョー」を使うことが楽しそうでした。しかし、彼らと僕との会話にあまりにも「ビミョー」が多用され、僕のストレスがかなり上昇したので「萩原先生に話すときにはビミョーは禁止令」を発令しました。この点では失敗でした。

このような「ビミョー」に使えば便利な言葉はいくらでもあります。ある成人には、「まあまあ」という言葉を勧めました。最近では、「ヤバい」が流行っていますね。若者世代の代表的形容詞と言えるでしょう。この言葉が便利であり、また難しくもあるところは、良い形容と悪い形容の両方に用いることができることです。学生たちの会話を聞くと、「ちょっと、このお菓子ヤバい！」や「今日提出のレポート、チヨーヤバい」などと、言葉を聞いただけではなんだかわからないセリフがたくさん出てきます。

このような言葉が、ASD当事者のソーシャルスキルの救いになるとは思っておりません。しかし、



このような言葉の使用を取り混ぜた支援というものは、より実生活に適したもの、つまり適応行動を目指しているのではないかと思うのです。どのようなソーシャルスキル支援手段を用いても、実際に使えなければ意味はないのですから。

ソーシャルスキル支援に共通するものとして、僕が考えることを幾つか挙げてきました。これが全てではありませんし、本稿に入りきらなかったものは今後取り上げていくつもりです。教育・福祉現場でお手伝いをさせていただくと、ソーシャルスキル支援のニーズがとても高いことを実感しますが、ちょっと「固すぎ」のような気もします。

ソーシャルスキル支援に限らず、適応行動一般の支援についてもそうですが、「とりあえずここら辺は押さえておこう」というような、サバイバルするための支援を優先するべきだと思うのです。今後ますます増加する特別支援教育関連のニーズを考えると、「ちょっと変わっているけどなんとか

やっていける」という目標設定がこれからの支援計画では必要なのでしょうか。この連載もこのような観点で続けていければと思っています。

#### 参考文献

- アイリーサ・ギャニオン（著）、門眞一郎（訳）『パワーカード アスペルガー症候群や自閉症の子どもの意欲を高める視覚的支援法』2011、明石書店  
キャロル・グレイ（著）、門眞一郎（訳）『コミック会話 自閉症など発達障害のある子どものためのコミュニケーション支援法』2005、明石書店  
キャロル・グレイ（著）、服巻智子（監修）、大阪自閉症研究会（監修）『ソーシャルストーリー・ブック 入門・文例集【改訂版】』2010、クリエイツかもがわ  
ジャネット・マカフィー（著）、萩原拓（監訳）、古賀祥子（訳）『自閉症スペクトラムの青少年のソーシャルスキル実践プログラム』2012、明石書店  
ブレンダ・スミス・マイルズ、メリッサ・L・トラウトマン、ロンダ・L・シェルヴァン（著）、萩原拓（監訳）、西川美樹（訳）『発達障害がある子のための「暗黙のルール」〈場面別〉マナーと決まりがわかる本』2010、明石書店

## 連載

# ASDと適応行動 Part 2

萩原 拓

北海道教育大学旭川校

前回は、適応行動や適応スキルはどのようなものか概要を述べました。そしてASDのある人々の適応行動は、定型発達主体の世の中でどのように機能しているのか、また問題なのかについて注してみました。今回は、なぜ適応行動はASDにおいて重要なのか、そして適応行動を基盤とした支援とはどのようなものなのか、考えてみたいと思います。

## 知的機能と適応行動

ASDをはじめとする発達障害のアセスメントでは、知的・認知機能の検査、つまりIQテストは必ず行われます。この検査からいろいろなことが分析されますが、主な目的は知的障害の有無、そして知的機能のレベルや特性を知るということだと思います。ASDには、重度の知的障害から天才レベルまで幅広い知的機能レベルが含まれます。そんなに広い範囲の中に、一定の特性があるからASDというように捉えるのはかなり無理があるような気がしますが、こうなってしまっている現在は致し方ありません。療育手帳のような福祉関連のサービス、また、特別支援教育に代表される教育関連のサービスには、IQスコアは欠かせないものです。なぜ、IQはこんなに重要視されているのでしょうか。一番の理由は、IQという指標がとても広い分野で使われているからだと思います。人間の能力や考えなどは目に見えないものであり、また、特性を確実に捉えることは不可能ですから、なるべくたくさんの人々に使われている指標は基準になって当然ですし、そうあるべきだと思います。しかし、IQが特に深く関連している知的障害もIQ

だけでは決定されないのでです。

知的障害には、顕著な知的機能の遅れと適応行動の困難性の双方が存在すると言われています。知的機能は、ウェクスラー式をはじめとする検査によって、IQスコアで数値化して測定することができます。しかし、適応行動はどうでしょう。日本には、これまでにも適応行動を測定する尺度は存在していましたが、尺度がカバーしている範囲やスコアリングは、IQテストのようなものではありませんでした。必然的に、測定はよりわかりやすいIQ検査が多用されますし、判定にもIQの比重が大きくなります。

前回でも少し触れましたが、もうすぐ、日本版Vineland-II適応行動尺度が出版されます。今号のアスペハートから、黒田美保先生がVineland-IIを中心に連載をされていますので、この検査について詳しいことはそちらを見ていただければと思います。Vineland-IIでは、ウェクスラー式と同様の結果を得ることができます。このことは、日本でようやく適応行動評価がIQと同様に行えることを意味しますし、さらに、知的障害の捉え方がより正確に行えることにもつながります。

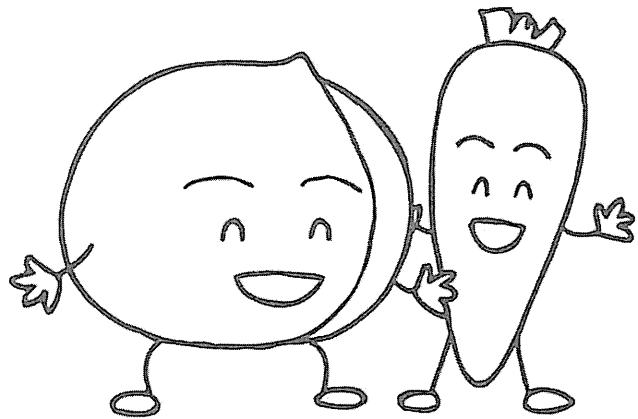
さて、ASDにとって、適応行動評価とはどのような感じになるのでしょうか。実はVineland-IIは、ASDのアセスメントの一部として特に英語圏ではよく使われています。前版のVineland適応行動尺度では、有名なショブラー先生を始めとするチームが自閉症に合わせた標準サンプルを作ったくらいです。このことは、ASDの適応行動の特性が、アセスメントや支援にとってとても重要であることを意味します。しかしながら、社会性スキルや日常生活スキルを正しく評価し、支援に

つなげていくことは、日本のこれから福祉・教育にとって必要なことは確かですが、これはASDのみでなく、すべての障害に当てはまることです。

高機能ASDの方々が成人期を迎えている現在、このような特性のある人々が大人にならざるようになるのかということが明らかになってきました。研究などで指摘されていることは、高機能ASDにおいては、知的機能と適応行動のアンバランスが顕著に見られることが少なくないということです。このようなケースでは、知的機能は平均またはそれ以上のレベルにあるにもかかわらず、適応行動レベルが年齢よりもはるかに低いことがわかっています。学齢期が終わる頃までは、家庭では保護者に面倒を見てもらい、学校では決まったカリキュラムに沿って生活することが可能なので、社会的スキルの問題などは目立ちますが、適応行動の全体的なレベルは検査などを特にする機会がなければ明確に把握できません。しかし、家庭の保護も年齢に応じて少なくなり、また学校という枠もなくなる青年期・成人期になると、「社会における生活」の困難性が実態を伴って見えてくるようになります。つまり、就労、自立的生活、QOL（生活の質）の安定などの場面で難しくなってしまうことがあるのです。ASDにおける知的機能と適応行動のアンバランスは、Vineland-IIによって日本でもより明確にわかるようになると思われます。何よりも、より多くのASDのある人が自立的生活をしていくためには何が必要なのかがわかり、どのような準備をより早期にしていかなければならぬのかを突き止めることができるでしょう。

## 「君のIQは？」

僕はアメリカで、こんな20代の若者に会いました。今から15年くらい前のことです。当時のアメリカではアスペルガー症候群がメディアでかなり注目されていた頃です。彼はテレビなどでアスペルガー症候群のことを知り、自分はこの症状にピッタリだと気づいて、自分で診断を受けに行きました。彼は自分の予想通りの診断結果を得ることができました。診断を受ける際、当然のことながらWAISというIQテストをやって、自分がどのくらい



いの知的機能があるのかを知ることができました。彼はほとんどの領域を完璧にクリアして、140以上の全検査IQを得ました（確かなスコアは忘れましたが、ほぼ天井だったと思います）。僕が彼に出会ったのは、そういった検査を受けて診断が出て間もない頃でした。

当時、僕が所属していたカンザス大学では、アスペルガー症候群などの高機能自閉症スペクトラムのある子どもや若者のためのキャンプを始めしていました。それは、現在アスペ・エルデの会でもやっているようなトレーニングとレクリエーションを混ぜ合わせたもので、全米から参加者がやってきました。彼はその一人だったのです。博士号をとったばかりの僕は、そのキャンプの雑用を一手に引き受け（させられ）ており、他の州から来た彼のことも、キャンプが始まるまでの数日間面倒を見るように言われていました。

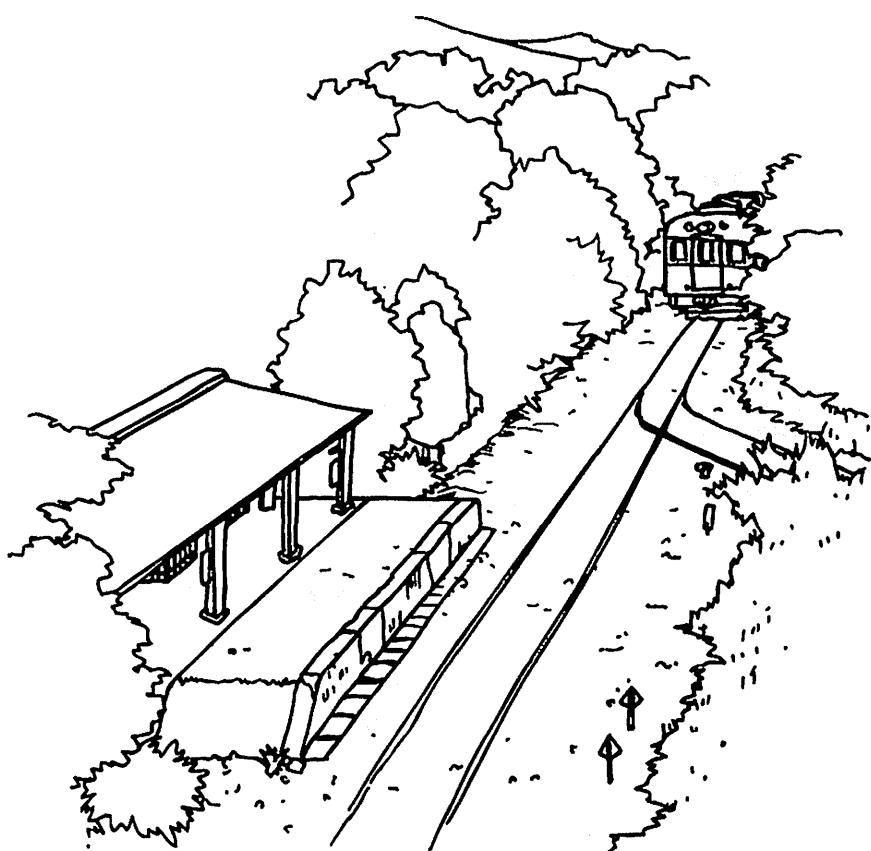
彼はとても豊かな個性を持っていましたが、特に初対面の人とのあいさつが特徴的でした。みなさんも英語の授業で習ったように、「Hi. I'm ○○. Nice to meet you.」などとあいさつを交わすのが一般的ですが、彼は自分の名前を言ったあと、必ず「君のIQスコアはいくつ？」と訊くのです。キャンプのスタッフのほとんどは大学院生だったのですが、当然かれらは自分のIQスコアは知りません。返答に困っていると、「僕のIQは140だよ」と自分のIQを教えるのです。これには、さすがに僕も驚きました。また、キャンプに参加している当事者の少年などにも同じスタイルであいさつしようとするものですから、なんとかしなければなりませんでした。当事者の子どもたちは、個別の教育支援計画に参加していることもあって、自分

のIQとかは大抵知っています。訊かれれば自分のIQを答えるわけですが、その返しに彼のほぼ到達不可能な高いIQを聞かされれば、いやな気持ちをする子どもも少なくはありません。僕は、彼にそのことを話しました。僕も若かったものですから、かなり厳しへにやりましたが。彼は最終的に納得してくれたのですが、彼にとってIQは話のきっかけになる唯一のネタだったわけです。彼にとっては、例えば、「君背が高いね。何センチ?」などという会話とほぼ同じレベルだったわけですが、彼のあいさつスタイルは「適応」と捉えるにはかなりずれています。

彼の好きな分野はエンジニアリングだそうで、何百ページもある専門書をすべて暗記していました。素晴らしい記憶力と、一般人をはるかに超える処理速度は彼にとっての強みであり、まさに天才児を表す「Gifted」がありました。しかし、彼にとって致命的だったことは、エンジニアリングで必要なクリエイティブな考え方や、問題解決スキル、またチームワークのスキルなどが低かったことです。彼自身は大学院のエンジニアリング分野

に入学するか、関連する企業に勤められるに決まっていると思っていましたが、高校を卒業して数年経った当時でも彼の希望通りにはなっていませんでした。

また、自分で生活するスキルも年齢相応ではありませんでした。買い物などはできますが、自分が生活するために必要な物を計画的に購入するといったことは不得意でした。さらに好きなことが目の前にあると、周りのことは目もくれずに突進してしまう傾向もありました。彼が滞在している間の移動はすべて僕が運転していたのですが、たくさん車が展示してある自動車ディーラーの前を通ると、「止めてくれ」と頑固に要求します。仕方なくUターンをしてディーラーの前に停車すると、無言でドアを開けて一人で行ってしまいます。彼は車が大好きで、このような場所をみると車の写真を撮らずにはいられなくなってしまうのです。いい大人が、車を買いもしないのにカメラを構えて嬉々として車が並んでいる間を右往左往しているのは奇異に見えてしまいます。当然、ディーラーの社員が近づいてきて、はじめはフレンドリー



に彼に話しかけ、一体何をしているのか尋ねます。先にも述べたように、彼のあいさつは独特であり（さすがに社員にIQを訊くことはありませんでしたが）、しかも普通の人は使わないような難しい言葉を並べ立ててしまったりますので社員は全くわかりません。要は、車が好きなので写真を撮りたいという意図を話しているのですが。仕方がないので、僕が社員に説明します。一般的にこのようなケースは自動車ディーラーで頻繁に起ることではありませんので、社員も戸惑い、中にはイライラする場合もあります。何かの調査なのかと勘ぐってしまうこともあるでしょう。残念なことに、本人にはそのようなことは分かりませんので、彼は文字通り「我が道を行く」行動を続けてしまうのです。

出会って数日間、彼は僕にとってまさに「お荷物」でした。彼とのさまざまなやりとりを通して（ほとんどは僕にとって迷惑なものでしたが）彼の特性が理解できるようになると、「結構いいやつだな」と思えるようになりました。僕は彼に向かって、彼の行動が周りの人にどのように映るか、また、どのように思われるのかをかなりストレートに、ぶっきらぼうにコメントし続けました。彼にとっても、ここまでハッキリ言われた経験はなかったようで、キャンプを終えるころには人の接し方が少し改められるようになりました。今だったら決してこのようなアプローチはしないと反省することも多かった彼との出会いですが、知的機能と適応行動のアンバランスを考えるときには、この経験がいつも思い出されるのです。

## 就労期に問われる課題

本当に偶然なのですが、日本の大学での同期生が障害者職業総合センターに勤務し、発達障害を中心に支援に携わっていることもあります。日本における発達障害の就労については、まだアメリカの大学に勤務していた頃からの関わりがありました。また、前の稿でも触ましたが、旭川で就労支援にも関わっています。このようなつながりから、発達障害のある方々を雇っている企業や、それを支援している方々と交流する機会もあり、実際に雇用側はASDのある人々の就労になにを期待

しているのかについて、ごく一部分に過ぎないかもしれませんのが少し分かってきたことがあります。

まず、多くの就労場面で、「HELPを出す」ということが問題になるようです。このことは、就労期前のライフステージでもよく見られることだと思いますが、就労場面ではこの問題は特に見えやすくなります。それは、企業にとって生産性や効率性のマイナスにつながるからです。自分の状態および能力や限界がわかっているからHELPが出せるのであって、このことがわかっていないと、自分で全く処理できなくなるまで気づかないことがあるそうです。また、「困った」という気持ちがなければ、HELPを出す必要性も発生しないでしょう。

次に、「生活リズムの安定」があります。学校に行っていた頃は比較的安定していた生活リズムも、卒業後、就職活動や就労準備が長期化し、徐々に昼夜逆転に傾いていくというケースもあるでしょう。企業としては、何はともあれ時間通りに勤務してくれるのが大前提になりますから、朝定時に出勤するということから困ることもあるようです。また、就労移行支援などの、就労の準備をする支援機関でもこのことは問題となっています。いろいろなスキルやマナーを教えようにも、来るのがまちまちということになってしまうと、当然効果は期待できません。

そして、「衛生面と健康面」です。生活リズムとも密接な関係にありますが、食品関連の企業のみに関わらず、この部分は集団で働く場面ではとても重要になります。歯磨き、洗顔、入浴にはじまり、衣服の洗濯やちょっとした身だしなみも雇用側にとっては目立つ問題だそうです。また、朝起きられないということだけではなく、お腹や頭が痛いなどという理由で遅刻・早退や欠勤をするということが目立っている職場もあります。ストレスもあるでしょうが、肉体的にも疲れやすいといったこともあるでしょう。発達障害の方々が働く場所には、本人がこれまで生活していた環境ではすることのなかった肉体的労働が要求される場合が少なからずあります。このようなことも、健康面での問題につながっているかもしれません。

さて、ASDならではの問題である社会性スキルですが、意外にも雇用側の多くはそれほどの重要

問題に挙げていませんでした。これは、あくまでも僕のこれまでの経験と主観によるものですから偏りはあるかもしれません。ある企業の社長さんは、「発達障害があるということで、社会性についてはある程度こちらも了解している。仕事に必要なスキルも教えればいい。やっぱりうちも商売だから、まず働くというところがきちんとしていなければ…」のようなことを言っていました。先に挙げたHELPや生活リズムなどの問題は、発達障害のある人々に対して雇用側が予測していなかったことかもしれません。さらに、就労支援において、または学齢期の頃にこのような問題が将来発生することへの準備や支援が整っていなかったことも考えられます。いずれにしても、これらの問題はすべて適応行動の問題であり、就労や社会的自立につなげるASD支援において、すぐにでも手を打つ必要があります。

しかし、これらについての支援を誰がどこでやるのでしょうか。海外の文献でも移行支援の問題としているものが少なくないのですが、これまで述べてきたことを考えても、卒業してからでは遅すぎることは明らかです。ならば、特別支援教育すべてやるべきなのでしょうか。それにしては、あまりにも現在の体制は十分ではありませんし、教員の準備もできていません。以前講演でこれに関連した話をしたときに、中学校の特別支援教育コーディネーターの先生が来ていました。講演後に話をしに来てくださったのですが、彼も就労のためにこのようなニーズがあることを感じていました。しかし、中学校の特別支援学級では、高機能ASDのある生徒たちの多くは通常学級に普段通っており、特別支援オンリーの場を定期的に一定時間設けることはなかなか難しいようです。福祉・教育機関すべてのコンセンサスを得るためににはもっと考えていかなければならぬ課題ですが、特別支援教育を現在受けている子どもたちは次々に大人になってしまいます。

## 何がライフステージを通して目標となるか

これまで述べてきたように、適応行動はASDにとって大きな課題であり、これからアセスメン

トや支援に不可欠な分野であることは明らかです。この適応行動の支援を中心に、どのようなことがライフステージを通して目標となるのか考えています。

まず、「自己認知・自己理解」です。これは、ASDという診断名を知ることでもなく、メディアを通してASD特性を自ら学んで納得するというものでもありません。先に登場したIQスコアを訊いてしまう彼のように、ASDの存在を知って納得してしまうというケースもありますが、多くはそのようにはいかないでしょう。僕が目標したいのは、「自分を知る」ということです。それにはまず、自分の得意・不得意などを客観的意見と同じく分かっていることが大切です。これが分からなければ、当然HELPを出すこともできません。また、自分という存在を知ることは、集団における自分自身の立場やふるまいなどを把握するということにもつながると思います。学校卒業を機会に自分の診断名を知るというケースは未だに少なくないと思います。うまく軟着陸する場合もありますが、逆の結果になってしまこともあります。つまり、すでに自分自身についてある程度分かっていない場合、診断名を聞かされたあと、自分自身やこれまでの生い立ちなどの事実、そして自分が思い描いていたものとはるかに違う就労や生活の現実について納得できずに、かなりの葛藤を強いられることもあります。定型発達の若者にとっても最近課題になっているような気がしますが、自立のための自己認知に到達するような環境を幼児期からつくっていく必要があると思います。適応行動に含まれる社会性スキル形成には、この自己認知がとても役立ちます。

次に、「生活リズム」です。これは、就労期においても問題となります。それ以前でも問題となる兆候はよく見られると思います。学齢期などで生活リズムの問題が目立たない理由として、家庭環境の支援が手厚いことが挙げられます。試しにその支援のレベルを下げてみると、本人がどのように生活リズムを維持していくのかがわかります。子どもなら、親が構わなくなれば生活リズムが崩れていくのはごく当たり前のことですが、ASDの場合は、それが大人になっても続く、またはより強調されていく可能性が高くなります。

最後に、「適応手段」です。目標の基盤は適応行動ですから、当然と言えば当然なのですが、これは定型発達における適応行動ではありません。手段としているのは、本人独自のスキルやツールを開発して使っていくことを意味しています。ASDの適応行動の発達やスキル獲得が定型発達のそれらと違うことは、これまでの研究でも明らかです。前稿でも述べましたが、定型発達ワールドに適応していくにあたって、何もないままではできないことがASDのある人々にはたくさんあります。ですから、そのためにツールを利用します。買い物スキルのレベルを維持するために、スマートフォンのアプリを利用することもあるでしょう。学校や会社での対人関係をそれなりに保っていくために、自分だけのルールブックやセリフ集（ソーシャルナラティブのようなもの）を携帯するのもよいと思います。さまざまな環境での自身のストレスをコントロールするためのストレスメーターや、感覚要求やカームダウン（クールダウン）

に役立つグッズをポケットに入れておくのも効果的です。これらは、定型発達の人は使わないかもしれません（使ってみた方がいい人は多いと思います）、ASDのある人にとっては生活していくために、つまり自身の適応行動のために必要な物になります。どのライフステージにおいても、このような適応手段の開発は常にされるべきだと思います。また、多くの場合、効果があったスキルやツールは、その後成長しても十分使えるものです。例えば、視覚的スケジュールが幼稚園の年長さんで役に立った場合、小学校や中学校ではちょっとお兄さんバージョンにグレードアップして、高校生になったらスマートフォンのスケジュールアプリに移行してというように、ツールの基本的なメカニズムは変わることなく本人をサポートしていきます。

以上、僕なりの目標を述べてみました。次回は適応行動に関連して、もう少し細かい領域で、支援につながる僕の考えを述べていきたいと思います。

【特集】シリーズ・発達障害の理解② 社会的支援と発達障害

# 地域で孤立する成人を 支援の場にどうつなげていくのか

萩原 拓 Taku Hagiwara

北海道教育大学

## I はじめに

乳幼児期・学齢期における発達障害の診断が増加していることと並行して、青年・成人期においても発達障害の診断は増加している。成人期の診断が乳幼児期・学齢期のそれと異なることは、多くの場合、無気力や抑うつ、職場や生活環境への不適応などの二次的な障害や困難のために医療機関にかかり、生育歴や現在の症状などから発達障害の診断が下されることである。つまり、現在成人の当事者の多くは、発達障害という特性のみならず、日常生活に著しく影響するなんらかの精神障害や困難性を併せ持つて生活している。一方で、これまで医療機関にかかることなく、自身も含め家族や周りの人々も生活不適応の理由がわからず苦労をしている成人が多く存在していることも事実である。学齢期の子どもであれば「グレーゾーン」などと呼ばれ、支援の対象となることも現在では多くなってきているが、成人の場合、ニートやひきこもりなどの顕在化している状態のみで認識されてしまっていることもある。地域での発達障害者支援を考える場合、このような診断についていない成人たちのことも考慮しなければならない。

現在、就園・就学している児童生徒は特別支援

教育のサービスを受けることが可能であり、また支援が必要な児童生徒に対する教職員の数も、卒業後の福祉サービスや支援員の数に比べて圧倒的に多い。このことは、障害や困難に対する気づきやすさや支援に移行するスピードに直接関係している。つまり、子どもに園や学校で何らかの問題が発見され、医療機関へのつながりが作られ、教育的支援を受けることと、成人が学校卒業後、日常生活に顕著な不適応が見られて医療や支援サービスにつながることには大きな差があるのが現状である。別の見方をすれば、乳幼児期・学齢期では特別支援教育が用意されており、支援につながりやすくなっている。一方、多くの成人の当事者たちは、地域で自分たちが関わることのできる場所を見つけることができずに、孤立した生活を余儀なくされていることが多い。本稿では、この状態が維持されてしまっていることの要因を展望し、そして発達障害のある成人たちの「支援につながっている社会生活」に必要なことがらを考察していく。

## II 地域での孤立に至る経緯

社会性の問題は、言うまでもなく発達障害、特に自閉症スペクトラム障害（ASD）に顕著に見

られる特性である。この問題は、ほとんど支援を必要としないで社会生活を送ることができるレベルから、支援機関によるフルタイムの支援が必要なレベルまで個人差が大きい。このレベルの違いは、一見IQなどで表される知的機能と比例しているように感じられることがあるが、必ずしもそうではない。知的機能が高い発達障害のある人でも、社会性スキルや生活スキルなどの適応行動レベルが同世代の人々よりも著しく低いケースは数多い。これは、より複雑で高度な適応スキル（つまり大人、社会人にふさわしいスキル）が要求される学校卒業後の生活に大きく影響する。

特別支援教育が発足する前の学齢期はどうだったであろうか。通常学級では、それぞれの学年のカリキュラムに沿って行動し、課題をこなしていく。評価は主に教科の成績である。対人関係などの社会性スキルに顕著な問題は当然学校や家庭で指摘されることもあるが、具体的な支援が通常学級で実践されることはずない。児童生徒は成績を基準に進級・進学していく。社会的な失敗体験の蓄積や集団からの孤立は、この期間にすでに形成されてしまっていることが多い。しかし、学校ではクラスという集団を決定する単位があるために、本人と集団との関わりが最小限であろうとも、集団として行動している、あるいはさせられている。高等学校から大学や専門学校などへ進学するに従って、園や学校でなじんだクラス単位制は徐々にあいまいになっていく。つまり、集団行動よりも個人行動が主体となり、自分から社会環境に関わっていかなくてはならない機会が急速に増加していくのである。

一方、大学の理系専攻によく見られる研究室での勉強や実験は、クラス単位制とは異なり、専門をテーマとする集団環境であるため、ASDのある人々にとっては過ごしやすい環境であることが多い。しかし、大学や専門学校に通っていた学生の大部分にはこのような「居場所」が見いだせず、この学校環境を小規模な地域環境とするならば、地域における孤立はこの時期にすでに始まっていると言えるだろう。

学校を卒業すると、就労などの場合を除き、集団を形成する枠はほとんど目に見えなくなる。いわゆる地域社会という枠で個人は生活することになるのである。適応スキルレベルの低い発達障害のある成人たちにとって、安心して過ごせる「居場所」は地域社会ではなかなか見いだせない。自分のレベル以上の適応スキルを必要としない、家庭や自分の部屋などの限られた環境から出ようとしなくなることもある。彼らは支援のニーズをこの時点で感じているのだろうか。

### III 現状への満足、または変化することへの躊躇

地域での社会的関わりをほとんど持たない成人たちの生活スケジュールはほぼ一定であり、日常と違うイベントはあまり起こらないことが多い。昼夜逆転しているケースも少なくなく、夜は趣味に没頭していたりする。ここで問題となるのが、趣味を持っていないケースであり、インターネットの配信動画などに一日のほとんどの時間を費やしてはいるが、趣味に合った目的に基づいた行動ではない。このような場合、目的のない時間を毎日過ごしているため、曜日ごとの変化もなく、なにか変わったイベント（半日外出して買い物、家族で親戚への訪問など）が起きたりすると、疲れてその日の残りは寝ていたり、それが翌日まで続くようこともある。

このような成人たちへの地域支援を難しくしている要因の一つとして、彼らが現在の生活パターンに満足していることが挙げられる。この「満足」という表現にポジティブなニュアンスもネガティブなニュアンスもない。現状に対する意見も特に持たず、のままでもいいのではないかという漠然とした状態を筆者は「満足」とした。実際、筆者が関わった成人の当事者のなかには、今の生活について「特に不満を感じていません」「このままでいいです」と話す方々もいた。また、新しいことをしてみようというきっかけに対してもかなり慎重であり、単発的な地域のイベントであれば

なんとか参加可能であるが、毎日・毎週などの継続的な活動への参加は難しく、これまでやってきた生活パターンへ回帰してしまうことも多く、新しい生活スケジュールの維持には困難が伴う。このような状態は、就労訓練や「当事者会」などを継続的に実施したとしても参加には至らず、支援者側の努力だけでは報われないという結果にもつながる。

#### IV 家庭環境

社会適応レベルが低く、未就労の発達障害のある成人の多くは親やその他の家族と同居している。家族関係が良好なケースはもちろんある。しかし、家族関係は良くも悪くもないのだが、家族と別の次元で同じ家に住んでいるというケースは少なからず存在すると思われる。つまり、他の家族とは別に、成人の当事者が自分の生活スケジュールに従って生活を続けている場合である。このように家族全体の生活パターンがお互いに不干渉のまま一種の不变的なものとして継続している場合、親の定年や病気、または逝去などに対する危機感を覚えつつも、今どうしたらよいかという具体的な手立てを当事者や家族が発見するには至っていないことがある。

また、幼少期から親が子どもの世話をし、その世話の質や量が子どもが成人になるまでそれほど変わっていない場合も、社会的孤立を維持させている要因となる。ほとんどの親は、このままではいけないと思っているのだが、定期的なコンサルテーションなどのみで現状を開示し、ルーチン化してしまった生活パターンから脱却していくことはなかなか難しい。成人となった子ども本人にも、親に全く頼りきっているケースもあれば、「自分を認めてくれない」「いろいろと口を出してくる」と不満を他者にもらすケースもある。不満を持っている場合でも、「親が今いなくなったら」「一人暮らしをしてみたら」などの現実的な会話をすると、やはり現状では親の存在は「自分が生きていくために」必要だと述べる。しかし、その現状

が当たり前だと思っていることも少なくなく、このような場合には支援が必要だという自己認識には即座に至らない。固定化してしまった家庭環境も、地域支援へのつながりを阻むハードルとなるのである。

#### V 趣味や余暇からのつながり

こだわりはASDの特性であり、ある特定の趣味に没頭している発達障害のある成人は多い。しかし一方で、特に趣味を持たずに生活をしている人も少なくない。趣味を持っていることは、それに対するこだわりの度合いが強ければひきこもって社会的関わりが少なくなる要因ともなるが、逆に、趣味を他者と共有することで社会的関わりのきっかけとなる場合もある。インターネットなどを通じて趣味を共有できる人と情報交換し、「オフ会」のように実際に会って交流をすることも可能である。このような交流の仕方には賛否両論あると思うが、孤立から脱出する手立ての一つと言える。また趣味ではないが、同じような考え方や困難性を持っている人々が同様の経緯で集まることもある。交通機関が豊富な都市部では実際に会うことでも容易にできるが、電車やバスも数時間に何本というような場所では、単にインターネット上の関わりのみが継続してしまうこともある。

余暇は、自分の好きなことをする時間であり、QOL（生活の質）の維持・向上には余暇が必要である。趣味を存分に楽しむ時間は当然余暇となるのだが、一日のほとんどが趣味に費やされる生活スケジュールでは、余暇と仕事・家事の区別がつけられない。このような場合はまず、趣味の時間を自己調整する支援を行い、並行して日常生活に必要な適応スキルを獲得して、「余暇」の存在を日中のスケジュールで確立することが重要である。例えば家事においては、家のなかのことだけではなく買い物などもスケジュールに組み込み、より地域社会に出る機会を増やしつつ、個人の趣味に没頭する時間も確保するというアプローチが考えられる。

一方で、特に決まった趣味を持たず、また決まった予定のない時間が一日のほとんどを占める場合、余暇支援が必要になる。地域の福祉機関などでは、発達障害のある成人の余暇支援を積極的に実践しているところもあるが、全国的にはまだ寡少と言える。ほとんどの余暇支援は家の外で行われるため、余暇支援自体が地域社会との関わりの機会となる。余暇支援では、当事者が自分のやりたいこと、楽しめることを発見し、それらを自らの意思で日常生活に組み込んでいくことがゴールとなる。しかし実際は、単発的なレクリエーションになってしまふことも多く、また前述したように、これまでの日常生活から離れることができず、定期的な支援機会に参加できなくなることもある。高機能発達障害の余暇支援は成功実践例がまだ少なく、支援手段が確立されていない。他の支援も同様であるが、現行の特別支援教育にこそ、この余暇支援は具体的に取り入れられるべきであり、成人期の社会適応にも大きく影響すると思われる。

## VI 地域の福祉サービスによるつながりのイニシアティブ

全国の発達障害の支援機関は、特別支援教育の発足をきっかけに教育・福祉双方において拡大および充実してきている。しかし、乳幼児期から学齢期の支援機関と比較して、成人のそれは必ずしも充実してきているとは言い切れない。発達障害者支援センターや就労訓練機関、NPOサポート機関など、多種の支援機関が存在している一方で、具体的に一貫した地域サービスが確立していないのが現状である。また、成人の当事者の多くが青年期以降で診断を受けている現在、大人になってから初めて支援機関を必要とする場合、まずどこに行ったら良いのか戸惑ってしまう。さらに、診断を受けてはいないが自身の発達障害特性に加えて、社会不適応によるこれまでの人生のネガティブ体験などの蓄積により、精神疾患に至らなくても無気力やひきこもりなどの現状に至ってしまう

いる人々のサポートをする支援機関の存在が地域社会において明確になっていないことも大きな課題である。

特別支援教育は、成人に至るまでの過程でできるだけ多くの発達障害特性のある人々が、自分なりの社会適応および社会参加をするために存在し機能している。しかし、特別支援教育の効果がいくら大きくても、学校卒業後の支援を全く必要ないとする人はそう多くはないだろう。

このような現状を総合して考えると、現在の成人への支援サービスは喫緊に解決しなければならない2つの課題を抱えている。1つは特別支援教育を受けていない現在成人期にある人々への支援であり、もう1つはこれから成人期を迎える特別支援教育を受けた世代への支援準備である。これらの課題をクリアするには、支援員をはじめとするマンパワーの充実と支援手段の確立が必要である。マンパワーについては行政と密接に絡んでいる問題であるため、ここでは地域のつながりとなる支援手段について考えてみたい。

先にも述べたように、地域で孤立している成人の多くにはルーチン化した生活パターンがあり、またさまざまな理由からそのパターンの現状維持を無意識にも肯定てしまっている。必然的に、このような状態では支援サービスに関わろうという動きは少なくとも当事者からは見られない。そこで、家庭環境へのアプローチが考えられる。当事者支援を中心と考えている場合、家庭環境が支援のハードルと感じられることも多くあるが、家族支援という観点で地域支援を供給することで、結果として当事者を個人単位の支援につなげていくアプローチは可能と思われる。このためには、ソーシャルワーカーに代表されるようなソーシャルワーク・サービスが有効である。日本では、発達障害者支援におけるこの分野はまだ未発達であるが、発達障害者個人の支援サービスと並行したソーシャルワークの充実が、これからの福祉サービスには必要となるだろう。

また、インターネットは現代の情報収集やコ

ミュニケーションに欠かせないものとなっているが、発達障害のある当事者たちにとっても、社会的に孤立している／いないにかかわらずインターネットで何らかのアクティビティをしている。当事者たち（定型発達も例外ではないが）に見られるインターネット関連の問題として、バーチャルリアリティの世界にはまってしまって、現実社会との関わりを行わなくなっているケースや、Twitter や Facebook に代表されるソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）での「友達づくり」に没頭し、それが社会的コミュニケーションだと満足しているケースがある。しかし、現在これほどインターネットが地域生活に普及している実態を考えると、発達障害の当事者への関わりのきっかけとしてインターネットの存在を無視することはできない。さらに、当事者のなかには、実際の会話よりもインターネットのほうが気楽に話せる人もいる。実際、少なくない数の当事者やその家族が SNS やブログなどを通じて、世間にメッセージを発信している。専門家のなかにも、イン

ターネットを利用した情報発信をしている人は存在する。このように、障害や特性に関わりなくインターネットがごく自然なコミュニケーションの場となっている現在、当事者を支援につなぐ場としてインターネットを活用することも考慮する余地がある。

## VII おわりに

発達障害のある成人を支援につなげる道筋は現在、青写真のない、または未完成の状態である。第1に、地域で行われている成功事例をできる限り多く収集し、分析することが先決である。第2にはマンパワーの確保。そして第3に、今後の支援対象者の増加に対して、支援が効率よく行われるようなアセスメントと支援テクニックを中心とした支援者研修の充実が早急に行われることが重要である。これまで論じてきたような当事者個人や家族へのアプローチも重要であるが、支援サービスの充実が地域において顕在化することは、彼らを支援へとつなぐ最短の道筋ではないだろうか。

 [特集] シリーズ・発達障害の理解① 発達障害の理解と支援

# 成人期の豊かな生活のための支援を構築する

福祉的支援への橋渡し

肥後祥治 Shoji Higo 松田裕次郎 Yujiro Matsuda

鹿児島大学

滋賀県社会福祉事業団

## I 成人期発達障害者の直面する課題

発達課題の概念を提起した Havighurst は、成人期前期（18～30歳まで）の発達課題として①配偶者を選ぶ、②結婚した相手と一緒に生活していくことを学ぶ、③家庭を形成する、④子どもを育てる、⑤家庭を管理する、⑥職業生活をスタートさせる、⑦市民としての責任を引き受ける、⑧気の合う社交のグループを見つけだす、といった課題をあげており、それまでの親の庇護下から一人で社会に旅立ち、さらに新しい家族のユニットを作り上げる時期として捉えている。これらの発達課題の妥当性は、社会的な価値基準に大きく影響を受けるものであるが、この時期においてこれらの課題の解決に取り組むように求められることが現在でも少なくない。そしてこれらは、発達障害の有無にかかわらないのが通常であろう。

一方、この時期に当事者たちは、どのような現況にあり、どのような希望を持っているのであるか。以下に辻井ら（2003）の18歳以上の64人に対する調査結果を見てみたい。生活形態に関しては、現在時点で家族と同居、一人暮らし、施設入所がそれぞれ、67.2%、25%、7.8%であり、71.9%の人が現状の維持を望んでいる。その一方

で、両親が亡くなった後の希望としては、一人暮らしが43.8%、自宅、その他、グループホームがそれぞれ32.8%、12.5%、9.4%という結果であり、一人暮らしを志向する者が最も多い結果となつた。また、一人暮らしに関する質問には、82.8%の人が心配を感じており、このなかの70.3%の人が食事、衛生管理、健康管理、危機管理などの面においてサポートが欲しいと回答している。なお、この調査に参加した当事者の26.6%が常勤雇用、17.2%が非常勤雇用、無職およびその他はそれぞれ12.5%、42.2%であった。

これらのデータを整理すると、成人時期の発達障害者の多くが将来において一人暮らしを志向しているものの、実際には日常生活の維持においては多くの不安を持ち、サポートを必要としている状態であるといえよう。また、就労に関連する支援も必要な状況であり、この時期の発達障害者の支援ニーズは多岐にわたっている。

## II 成人期における支援のニーズと 福祉的支援の必要性と法的枠組み

辻井ら（2013）は、発達障害者の青年期の問題として一定期間の安定就労によるその後のサポートの途絶、日常生活に必要な技能の不足に起因す

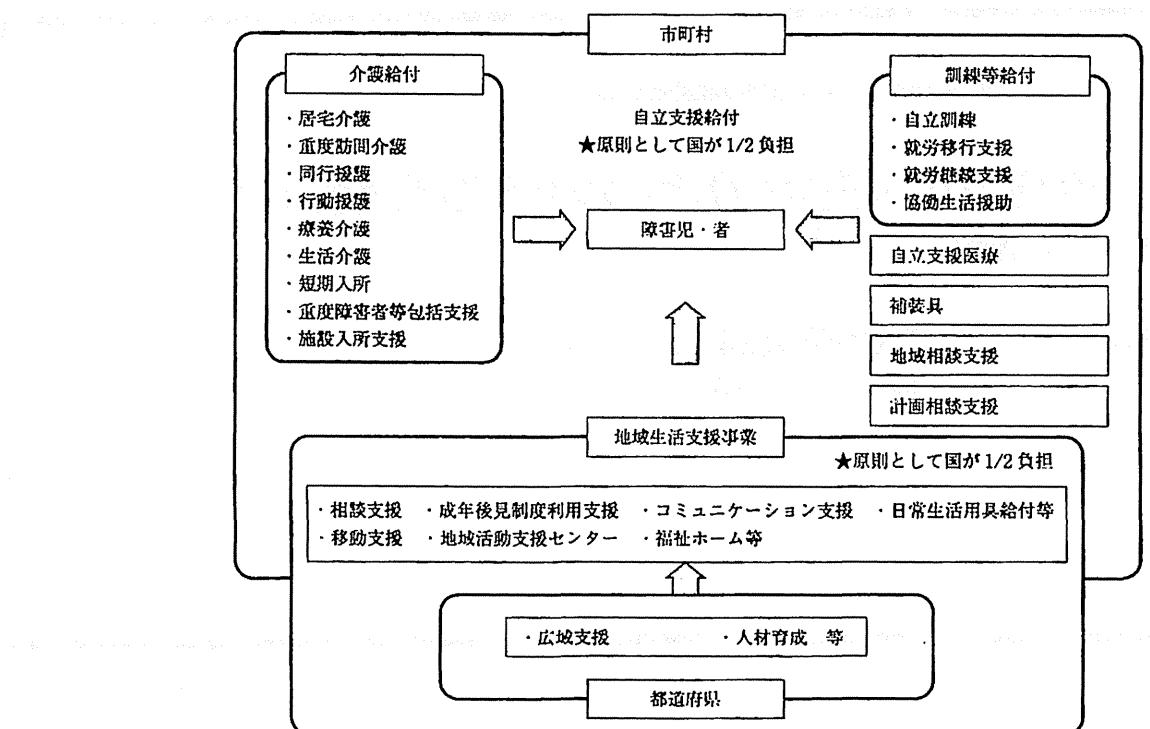


図1 障害福祉サービスの体系（前野, 2013）

る転職などがあることを指摘している。また、知的障害の少ない自閉症スペクトラム障害の本人や家族は、障害の認識がなく福祉的な支援を受けることなく成人期を迎える場合があり、このことがこの時期の危機的な場面での問題解決を困難にする場合もあると述べている。

このような状況にある成人期の発達障害者を支援する法的枠組みとして「障害者総合支援法」の存在を知ることは、重要である。この法律には、「基本的人権を享有する個人としての尊厳」が明確に位置づけられており、その障害福祉サービスの体系は図1（前野, 2013）のように整理されている。これらは、全国一律の共通サービスである介護給付、訓練等給付からなる自立支援給付と市町村の裁量によってサービス量を変化させることのできる地域生活支援事業から構成されている。

実際にはこれらを組み合わせて当事者のニーズに応じた福祉支援を実施することになる。発達障害当事者の支援においては、就労が維持されても日常生活に課題がありそのことで就労が困難になる場合や、就労および日常生活支援のいづ

れか、またはいずれも必要となる場合もある。また、知的障害が少ないケースの場合、日常生活の支援の必要性が見えづらいことも少なくない。したがって、青年期の発達障害に必要とされる支援は、多方面にわたり、しかも丁寧かつ継続的に行われる必要がある。国立リハビリテーションセンターにおいて実施された「青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業（平成20～22年度）」の成果からは、「障害福祉サービスである就労移行支援と生活訓練を組み合わせ、生活と就労場面にまたがる多様な体験中心の訓練体系を用いた個別支援は、発達障害成人の就労支援として有用であった」と考察がなされている（深津, 2010）。また、この報告においては表1に示すサービスメニューが自立支援法（障害総合支援法への改正前の法律）下において利用可能であるとされている。

このような流れのなかで滋賀県では、一人暮らしを体験しながら、発達障害の特性を踏まえ生活訓練と職業準備訓練を行う「発達障害者地域生活システム構築事業（ジョブカレ）」を2012年4月

表1 発達障害者の利用が見込まれる自立支援法下の主なサービス（深津, 2010）

(1) 相談支援事業
(2) 日中活動系サービス
①就労移行支援事業
②就労継続支援事業
(A [原則雇用有]型, B [雇用無]型)
③自立訓練（生活訓練）
④児童デイサービス
(3) 訪問系サービス
①行動援護
②移動支援
③短期入所（ショートステイ）
(4) 居住系サービス
共同生活援助（グループホーム）

から、横浜市では、地域移行に向けた生活アセスメントの場の設定からその後の暮らしのサポートを行う「発達障害者サポートホーム運営事業」として成人期の発達障害者の地域生活の定着を図る試みを2012年11月から展開している。以下に、福祉的支援の可能性について事例を示してみたい。

### III 福祉的支援の実際

#### 1 事例Aさん（アスペルガー症候群）／利用開始年齢22歳

##### 1. 利用目的と支援の方向性

ひきこもり暦3年のAさんはこの状態が良いと思っていなかったが、自分では何ともできずにいたところ両親の勧めで「発達障害者地域生活システム構築事業（ジョブカレ）」の利用を開始した。

当初の支援目標は生活リズムを整え、昼夜逆転の生活から脱却することであった。2年間、日中活動支援（職業準備訓練）と生活支援を実施して、ひきこもり状態から、何かしらの日中活動ができるようになるため、支援をすることであった。

##### 2. 経過

利用開始後4日目で日中活動のプログラムに参加できなくなり、居室のアパートでも昼夜逆転の生活を送っていた。その間、支援者はアパートで

何度も本人とコミュニケーションを維持し、興味・関心のあることを聞いたり、さまざまな場所に見学に出掛けたりした。このような取り組みのなかで、手芸に興味があり、実際に自分で作ることもしていたことがわかり、アパートで“刺し子”をする活動を取り入れた。また、外に出るための仕掛けとして、ポスティングの仕事を取り入れた。活動は9時から16時の間で行うこととし、こうした取り組みを続けることで昼夜逆転も解消された。ひきこもりの状態から徐々にエネルギーを蓄え、他の活動も行いたいという意欲が芽生えてきた。

#### 3. 就職活動に向けて

日中活動が軌道に乗り始め、生活リズムがついてきたため、新たな取り組みを提案した。それは、工場内で行う内職仕事であり、多くの従業員が通う工場で働くということであり、企業側に理解があり、配慮された環境を整えられるということでの提案だった。「働いてみたい」という本人の意思表示があったことでチャレンジしたが、実際に働けたことは本人の自信に繋がった。仕事終了後には振り返りの時間を設け、仕事に対する不安の解消、自己理解を促す支援を行った。

現在では本人が、「自分は就職できるのではないか」と思えるようになっている。私たち支援者も、本人の希望する職種に求人があればいつでも就職できる状態であると考えている。一年程でひきこもり状態から就職を考えられるようになったのは、本人の努力と、自信を持つことができるような仕掛けがあったからこそだと考えている。

#### 2 事例Bさん（アスペルガー症候群）／利用開始年齢20歳

##### 1. 利用目的と支援の方向性

家庭内暴力を繰り返すBさんの母親と弟は、毎日のように一緒に勝手口から避難し、父親の帰りを待つ生活を送っていた。これ以上は家族では支えきれないという家族の思いから、本人はあまり納得しない状況のなか、グループホーム（高機